

神山町における自然を対象とした子供の遊びについて

—大正・昭和初期を中心として—

民俗班（徳島民俗学会） 関 眞由子¹⁾

1. 大正・昭和初期の神山の子供たち

大正・昭和初期ごろまでは、豊かな自然を背景に野山を駆け巡る子供たち、チョウやトンボなど昆虫を捕まえて遊ぶ子供たちがいた。遊び道具は、草木や花を使って自分たちで工夫して作っていた。以下に述べるのは、かつて子供たちを夢中にさせ、今は忘れ去られようとしている子供の遊びについて調査したものである。方法は大正・昭和初期生まれの方々を対象とした聞き取りによるもので、神山町史編集委員会のご協力を得て、平成11年9月14、21、28日と10月5、19日に行った。遊びの種類、方法は多岐にわたるが、ここでは特に自然を対象とした遊びについて取りあげた。

当時は、戸外で年齢差のある集団を作って遊ぶ子供たちの姿がよく見られた。こうした遊びの背景には、通学距離が長いこと、兄弟姉妹が7、8人いる家庭が一般的で、地域内の子供の人数が多かったこと、などがあげられる。通学に片道4～8kmを歩く子供もいたので、冬場にはちょうちんを持って通学をすることもあった。遠距離の場合は、近所の子供たちが待ち合わせて帰るので、通学時に遊びを覚える機会も多かった。まさに「学校の帰り道は遊びの場」であった。また、たいていは帰宅すると家の手伝いが待っていたので、道草をしながら帰ることもあったし、手伝いを遊びとして楽しむようなこともあった。

子供の集団には、特に子供組のような組織は見られず、近隣の兄弟姉妹が集まる年齢差のある集団であった。子供たちは遊び仲間としての集団行動をとりつつ、社会性も身につけていったと考えられる。結束はきわめて強固で、年長の子供は年少の子供の面倒をよく見、また、年少の子供もよく言うことを聞いた。年長の面倒見の良い子がリーダー的な存在となるが、いったんリーダーとして集団を取り仕切るようになると、自分を犠牲にしても他の子供たちを守るという意識を持つことが多かった。山野の事情に詳しいことも、特に男児のリーダーにとっては大切な条件であった。

年長の女兒は弟や妹を背負ったまま遊ぶことも少なくなかったが、それなりに運動量の少ない遊びを選んでいった。なかには全く意に介さず走り回り、親たちをはらはらさせることもあった。また、就学前のよちよち歩きの幼児も遊びの仲間に入れるが、勝敗を決する遊びの場合は「あぶらご（水の中の油のように浮いた子供、つまり集団の中で一人前とし

1) 徳島市丈六町長尾62-15

て認められない子供)」とってその圏外においた。幼児も姉や兄に多少乱暴に扱われることがあっても、仲間入りを喜んでいた。

2. 遊びの種類

1) 草木を利用して遊ぶ、遊び道具を作る。

幼児の段階の遊びは、珍しい物を拾い集めたり、草花を採ったりすることが多い。やがて草花や樹木を利用して遊び道具を作るようになり、小学生になると次第に工夫をこらして優劣を競い合うようになっていった。また、男女間の遊びの相違も見られるようになる。遊び道具を購入することはまれで、たいていは男児は小刀、女児は針と糸などを使って自分で作っていた。年長の子供が草木の種類、遊び道具の材料の選び方、作り方などを教える姿が多く見られた。例を表1に示す。

2) 木の実などを採って食べる。

おやつが家に用意されることは少なかったので、経験豊富な年長の子供の案内により、食べられる木の実や草を採取するのも、遊びのひとつであった。例を表2に示す。

3) 生き物を捕まえたり、飼ったりする。

昆虫やオタマジャクシ、小動物などを捕まえ、成長を観察する、鳴き声を鑑賞する、あるいは戦わせるなど、観察、飼育を通してその生態を学んでいった。例を表3に示す。

3. 山学校

山河の多い土地柄を反映して、子供たちは自然の中で独自の遊びを創造していった。特に男児の中には、多少の危険を物ともせず、山中に遊び場を求めることがあった。以下に述べる山学校については、^{しもぶん}下分在住の元木守之氏（大正15年生まれ）の記憶によるものである。

前述のような遠距離通学をしている子供たちのなかには、登校途中目前に広がる大自然の魅力に抵抗しきれず、横道にそれて遊びに興じる者もいた。彼らは、冬はモツイ（枯れ草を集めて束にした物で、^{たいひ}堆肥などに使用する）5～7束を円錐状に並べて作った「小屋」、夏は高さが約3mくらいの木の枝の上に作った「イカ（床のことか）」と呼ばれる隠れ家の本拠としていた。「イカ」を作るために子供たちは枝の張った頑丈そうな木を探し、家から廃材などを持ち寄って枝に渡して床を作り、周囲の木の枝などで目隠しをした。人がやってくると、皆はイカに潜み、息を殺して通り過ぎるのを待ったという。ただしこのイカはあまり安全とは言えず、まれに転落する子供もいたようである。こうした子供の集団は、下分周辺では、^{きらいだに}喜来谷、檜谷の山の神さんの広場、南谷の3カ所にあった。登校途中に小屋やイカに集まり、勉強をせずに山の中を走り回っていたので、「山学校」と呼ばれ

ていた。彼らは日常を離れ、未知の場所で新しい体験を楽しんだ。集団の人数は4～7人、参加不参加は自由で、仲間とけんかをして負けるとしかたなく学校へ行くこともあったし、勉強嫌いの子供の中には、週の半分を山学校で過ごす子供もいた。

集団の中で、元気が良くていたずら好きで山の事情にも精通している子供が、リーダーとして活躍をした。学校をさぼるし、いたずらはするし、手に負えなくてよく荒れるということで「二百十日」（次に手に負えないのが二百二十日）などと呼ばれていた。年齢差のある集団（8～14歳）であったので、おのずから役割分担が決まっており、年少の子供は年長の子供が木に登って落としたりした木の実を拾う、見張り番をするなどを受け持った。特に規律は存在しなかったが、いたずらをして弱いやいじめをするようなことは少なく、多少乱暴なことをしても手加減を忘れなかった。

他の子供たちの集団とのいさかいはほとんどなかったが、3月の節供になると必ずと言ってよいほどけんかをしてきた。節供には遊山の弁当を持って山に登るが、先に見晴らしの良い峠に到着した子供たちの集団が「○○（傍示名）のどやっこ、何食うてのえる（大きくなる）、くそ食うてのえる」と叫ぶので、言われた集団も負けじと同様に叫び返し、峠に向かって追いかけた。追いかけられた方は、相手が強かろうが弱かろうが急いで逃げ、機会を見ては追いかける方に転じた。過激な暴力を振るうことはなく、追いかけたり追いかけられたりをゲームのように楽しんでいた。

遊びについては、前述した遊びのほか、大胆で危険を伴う遊びも行われていたので、遊びといえども真剣に取り組むことが多かった。夏であればセキボシ（表3参照）をし、捕った魚は「石焼き」といって石の上に載せ、下から石をあぶって焼き、常備しているみそをつけて弁当のおかずにした。秋には熟したカキを探したり、クリを拾ったり、タヌキやイタチの穴を見つけて、青杉葉でいぶり出すなどした。また、コビチ（ワナの1種で、たわませた木にヒモを付け、バネを利用して捕獲する）でハト、ヒヨドリなどを、捕って焼いて食べていた。ククリといって、針金を輪にしたワナをウサギの通り道に仕掛けて捕まえることもあった。アナバチの巣を探し、いぶしてハチの子を捕って焼いて食べ、みつを麦ワラで吸うことなども楽しみであった。子供たちは谷から谷の間、つまり自分たちのテリトリー内のタヌキやウサギなどの小動物の通り道、ツバナ、イタドリ、クワ、グミ、ビワ、クリなどのある場所を遊びの中で覚えていった。

4. 最後に

山の自然や動植物に深くかかわりながら、おおらかにたくましく遊んだ子供たちは、自然の中で季節の移ろいを体感し、自然の摂理を学んでいったことがうかがえる。また、山学校については、下分のみならず上分、^{かみぶん} ^{おろの} 鬼籠野などの深い谷のある地域の、随所に存在し

ていたと考えられる。分布等については再度の調査を試みたい。

最後に、ご協力、ご指導賜りました方々のご芳名を掲げ、心より感謝申し上げます。

- 稲飯 幸生 大正13年生まれ 下分字今井
- 大粟 玲造 大正6年生まれ 神領字西野間
- 高橋 諄 大正14年生まれ 鬼籠野字西分
- 元木 守之 大正15年生まれ 下分字拝府
- 阿部 靖子 昭和14年生まれ 神領字中津
- 井上 芳子 大正5年生まれ 上分字川又
- 上野 ぬ以子 大正13年生まれ 神領字中津
- 後藤 麻子 昭和12年生まれ 神領字東青井夫
- 谷脇 百合子 昭和2年生まれ 阿野字下地
- 森 泰枝 大正11年生まれ 神領字東大久保

表1 草木を利用して遊ぶ、遊び道具を作る。

男児・女児	<ul style="list-style-type: none"> ●マツボックリ、ドングリなどを集める。●めはじき。長さ3、4cmのクワの葉柄、セキシヨウの茎などを使って、目を大きく見開いたように、まぶたにつっかい棒をする。●ツバナ（チガヤの花芽）の少し硬くなったものを取り出して軽くもみ、くねくねと蛇のように元に戻る様子を眺める。●ぬすっと草（イノコズチなど）を着物にくっつける。●笛を作って吹く。タンポポの茎を軽くかんで吹く。麦の穂の茎を5～6cmほど切り、片端をかんで平べったくして吹く。スズメノテッポウの穂を抜いて残った葉の付け根を吹く。カシの柔らかい葉を丸めて少し平べったくして吹く。●音を出す。ソラマメの葉を軽くもみ、口の中で吸って裏側の薄皮を風船のように膨らませ、パチンとつぶす。アサガオの花のしぼんだものに息を吹き込んで膨らませてつぶす。ホオズキの実の中身を取り出し、皮を舌で押しつけてキュッキュッと音を出す。軽く握った手の親指のくぼみにヒュウジ（カラムシ）の葉を押し込み、もう片方の手のひらでたく。ナズナの実の柄を少し茎からはずし、耳元で振る。●タラヨウの葉の裏に木の枝など尖ったもので絵や字を描いて火であぶる（表に黒く絵や文字が浮き上がってくる）。●草相撲をする。雄松の松葉を交差させて引っ張り合う。同様にオオバコの柄、スミレの茎、マキの葉を交差させて引っ張り合う。●サクラのヤニを採って親指と人指し指で温めながら練る。もう片方の人指し指と親指を突き出し、指にヤニを絡ませる。●シユロの葉をお尻（しり）の下に敷き、柄を握って坂道を滑り降りる（松葉が落ちている場所、ヒガンバナの葉が茂っている場所などがよい）。※その他。落とし穴を掘って草などで隠す。通り道にあるチカラシバなどの草を輪のようにしばり合わせてつまずかせる。ギンコ（ロウ石、神山ではオンジャクともいう）を探す。
主に女児	<ul style="list-style-type: none"> ●首飾りを作る。タンポポ、レンゲを編む。糸と針で、サクラの花びらを通す。同様にツバキの花、ジュズダマの実などを通す。●マスワリ（カヤツリグサ）の茎を両端から二つに裂き四角を作る。●スギナの茎のハカマの節を抜いてもう一度差し込む。●お化粧。オシロイバナの実の白い部分をつぶして粉にして顔に塗る。●色水を作る。ツユクサ、アサガオ、ホウセンカの花びらを、小さな容器に入れた水の中でもむようにして、花の色を出す。●ササやヨシでササ舟を作って流す。●ネコジャラシ（エノコログサ）で馬（胴体は茎を編んで太くし、穂を尾に見立てる）を作る。●マキの葉を編んで手裏剣を作る。●麦の茎でねじりかご（ホタルかご）を作る。●デコ（木偶）、あるいはデコンボを作る。ソラマメのさやを胴体に、種子を頭と手のひらに用いる。エノコログサの茎をさや（胴体）に一本差し込んで両腕とするが、胴体に差し込む時に二つに折ったエノコログサの茎を両腕の中央部分に掛けておき、これを引くと腕が上下できるようにする。同様に、ソラマメでヤジロベエを作る。●おじゃみ（お手玉）。母親から余り布をもらい、中にトウモロコシ、大豆などを入れて作る。●ままごと。川原石を並べて間取りを作り、砂や花びらでつくった料理を大きな葉の上のせて、食べるまね事をするなど。●まり作り。まりのしんにはゼンマイの綿毛を用い、糸で巻く。●ジュズダマの実を集める。黒くなった実は極上品で、自分で作ったきん着などに入れて持ち歩く。これで数人でおはじきに似た「じゅず」（各自がジュズダマ数個を出し合い、指ではじいて地面に掘った小さな穴に入れる）」をする。●ガチャガチャ。幅1cm、厚さ0.5cm、長さ15cm前後の棒状の竹を4、5本、手のひらにのせて裏表をそろえ、次にはずみをつけて手の甲にのせる。表裏をそろえてから思い切りよく伏せ、表なら表、裏なら裏ばかりにそろえる。
主に男児	<ul style="list-style-type: none"> ●竹とんぼ。マダケを用いる。●水鉄砲。マダケを用いる。●突き鉄砲。マダケを用いギョロ玉（リュウノヒゲの実）、杉の実を玉にする。●ドングリの真ん中にキリで穴をあけ、細く削った竹を軸に差し込んでコマを作る。●竹馬。ハチク、マダケを用いワラ縄でしぼる。※その他「3. 山学校」参照。

表2 食べられる草木を採集する。

●ユスラウメ、ミカン、カキ、クワの実などを採る。●山に自生しているグユミ（グミ）やシャシャブ（アキグミ）の実、シイの実、エノミ（エノキの実）、マキの実、テンブナシの実、ムクの実、アケビの実、ノイチゴ、キイチゴなどの実を採る。●ツツジ、スイカズラの花のみつを吸う。●ニッキの根を掘ってかじる。●ギンナンを拾う。●ツバナ（チガヤの花芽）を食べる。●ワラビ、ヨモギを採る。●イタドリの若い茎に塩をつけて食べる。塩はサクラの枝を切って作った塩入れ（枝をおよそ直径5cm長さ10cmに切り、上端から2cm下に傷を入れ、下部を擦って皮と中身をはずし、中身を抜く。筒状になった皮に、底用に中身を2cm切り取って押し込み、同様にまだ、皮のついている上部の中身を2cmほど残して切り取りふたにする）に入れて持ち歩いた。

表3 生き物を捕まえたり、飼ったりする。

●チョウ、トンボなどを捕まえる。テニスラケット状にたわませた木の枝に、ジョロウグモの巣を網のようにつけてトンボやチョウを捕る。●カタツムリを捕まえる。●クヌギやスモモの木の下を探して、カブトムシ、ハサミムシなどを捕まえて飼う。●捕まえた昆虫に糸をつけて飛ばしたり、はわせたりする。●トンボ、アブのおしりに麦の穂を差し込んで飛ばす。●カエルのおしりに麦ワラを差し込んで息を吹き込んでふくらませる。●メダカ、オタマジャクシなどを捕まえて飼う。●ショウリョウバッタの後ろ足を捕まえるとバタバタするので「ハタタ、ハタオレ（機織れ）、オマン、ハタオレ、キヌノベベ（絹の着物）コウタロ（買ってやろう）」とはやす。●トリモチでメジロを捕って飼う。●ジョウラノマツキヤイ。捕まえたジョロウグモを互いに戦わせる。あらかじめ用意したクモの巣に2匹をはわせる。クモが白糸を出して、互いに巻き付け合うので、勝敗を競う（負け知らずの「金のジョウラ」を持つ子供もいた）。●田んぼでタニシを捕まえる。●メメンチャ（メダカ）川エビ、ジンゾク（ヨシノボリ）、ドジョウ、カマチャ（アカザ）などの小魚をすくう。●セキボシ（草やワラ束、あるいは川原石などで川の一部をせき止めて、魚を捕ること）をして、ギギ（ハゲギギ）、ヨシロ（カマツカ）、ハエ（オイカワ）などの魚を捕まえる。※その他、「3. 山学校」を参照。